

CLASSIC VICUS

2013 No.9

Vicus= ラテン語で地域、界隈の意

拝啓 青柳文化庁長官殿

文化減税と規制緩和で芸術振興を

志村嘉一郎

青柳先生、文化庁長官ご就任おめでとうございます。「文化人長官、役所に挑む」という記事も朝日新聞に出ており、早速、文化行政に先生の手腕を発揮されていることと拝察しております。

朝日新聞の企画委員時代には「エトルリア展」の監修でお世話になり、浜離宮朝日ホール支配人時代には、岩城宏之シリーズなどにお出でいただきました。小生はもともと経済記者ですが、「絵や音楽は本物を何度も鑑賞することにより、知見や鑑賞眼が培われる」との先生の教えによって、演歌と応援歌しか知らなかった小生も、朝日新聞の後半は展覧会やクラシックのマネージャーとして務めることができました。現在は、音楽プロデューサー協会の監査として活動しています。

クラシック音楽会や美術の展覧会など芸術イベントの開催は、失われた 20 年の間に極端な資金不足に陥っております。「若者やファンに本物を提供することによって、国民の芸術感覚を高める」というイベントの目的も、資金不足によって開催本数が減っているのが実情です。業界には「文化庁の補助金をもっと増やせ」とか「文化庁を省に格上げして、強力な大臣を置き文化予算を分捕れ」などという意見がありますが、消費税を上げても四苦八苦する硬直した政府の財政では、文化庁の予算を大幅に増やすのは無理なことでしょう。

そこで、「文化減税」を打ち出していただきたいと思います。最近、交響楽団に対して個人が 1000 万円以上も寄付するケースが出ています。「元気な時にいつも聴きに行った演奏会に足が悪くなり行けなくなった。冥土にはカネを持って行けないので、死ぬ前に好きな楽団の運営に寄付しておこう」という理由です。高齢者の一世帯あたりの純資産額は 5816 万円で、30 歳台の 3.6 倍、40 歳代の 2.1 倍もあります。来年から相続税が 40% も上がり、冥土にもって行くカネは急減します。孫の教育資金に減税する施策なども打ちだされていますが、いまこそ「相続税で取られるなら好きな芸術に寄付しよう」と誘いこむことができるとき考えます。一方、大企業の内部留保は 260 兆円にも上っています。大企業からの芸術への寄付もターゲットにできると思います。

個人や企業が芸術に寄付を出しやすくする税制改革が必要なのです。文化庁が少ない予算を、がんじがらめの規則で芸術イベントの補助金をばらまなくとも、税制の優遇策をすることによって、芸術イベントをする事業者が、資金を簡単に集めることができます。具体的には、個人や企業が芸術団体や芸術イベントに寄付をした場合、寄付金の額を税金から控除する制度です。また、寄付を受け取る事業者の資格の規制をゆるめて、寄付を受け取りやすくする規制緩和もしなければなりません。欧米では、芸術に対する寄付をしやすくしており、市民や企業の寄付で芸術イベントを繰り広げているのはご承知

のとおりです。

消費税についても、芸術減税が考えられます。いま、日本新聞協会や全国紙トップが消費税を引き上げる際に、新聞代金の消費税を安くするよう政府や国会に猛烈な働きかけを行っています。複数税率や軽減税率と呼ばれる制度で、食料品の税率を低くしている歐州の制度に習ったものです。新聞代金の消費税を低く押さえるなら、音楽会や展覧会の消費税も低く押さえることができるはずです。全部が無理なら低年齢層に限って入場料の消費税を低く押さえることでもよいと考えます。舞台公演や音楽会などは昼の公演を増やし入場料を安くして観客を集めざるを得なくなっているのが現状で、昼間働いている人が公演を鑑賞する機会が少なくなっています。低年齢層は可処分所得が少なく芸術の鑑賞どころではありません。低年齢層に限って消費税を安くし、本物の芸術に接する機会を増やすのも一案です。

2020 年には、東京オリンピックが開かれます。7 年後を目指してスポーツ予算は大幅に増額されるでしょう。芸術には五輪はありませんが、芸術の振興には、スポーツ同様いやそれ以上に政府に力を入れていただきねばなりません。それにはぜひ「文化減税」を、お願いしたいのです。

また、昨年できた「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」(劇場法)ですが、運用をゆるめて規制緩和していただきたい、との意見が強く出されています。

たとえば、劇場間ネットワーク支援事業への助成対象は、旅費・運搬費など経費だけで、出演料やホール使用料、広告宣伝費などは対象外となっています。また一つの都道府県内の連続公演には交通費は出ません。

ほかにも公共ホールは指定管理者制度で管理者が数年後に入れ替わっており、次の年度の行事も決められず、企画事業者は困っています。管理者も、清掃業者や警備業者などが出資した企業が指定業者になっている自治体ホールもあり、芸術公演とはほど遠いホール運営なのが現実です。これは総務省の管轄ですが、劇場法を施行する上でのネックになっています。

芸術は自由な社会にあって発展するもので、特定の思想や政治権力の規制によって発展するものではありません。芸術家やアートマネージャーが自由に公演できる環境を整えてほしい、と思っています。現在のような芸術不況が続くと、我が国の音楽文化や芸術文化は先細りとなり、死滅してしまうかもしれません。

現在は、文化行政の大きな曲がり角にきており、青柳長官のご奮闘を期待いたします。

[志村嘉一郎：本会監査、ジャーナリスト、前帝京大学教授、元浜離宮朝日ホール・有楽町朝日ホール総支配人]

オーケストラと歩んだ人生

日本オーケストラ連盟事務局長 吉井實行

1947年、東京大田区に4人姉弟の末っ子にして長男という、何とも言えない家族構成のサラリーマン家庭に私は生まれました。この年がベビーブームのピークの時で、世の中はどこも子だくさんで、たいへんだったという記憶があります。小学校一年時には教室数が足りないため2部授業というのがあって、一つの教室を午前と午後に分けて、別々のクラスが使ったりもしました。とにかく同世代の人間が多くて、高校進学になると、新設高校もかなりできました。こういった幼少年期、私はとにかく勉強が嫌いで、一応大学に行こうとしましたが、3年浪人して結局進学はしませんでした。音楽もちょっと好きというわけではなく、ピアノも習いましたが、「左手と右手で違うことをする」などいうことができるとは思えず、バイエルが片手から両手になった時点でやめてしまいました。

音楽との関わりはひょんなことからです。姉の1人が芸大の器楽科でピアノを、もう一人はやはり芸大でフルートを勉強していましたので、先生とか、友達とかたくさん遊びに来ます。その中には若杉弘さんや成田絵智子さんなどもいました。ですからとにかく音大生という存在がとても身近に感じていましたし、「音楽家という種族がこういうものか」ということが、そこで良くも悪くも知ったような気がします。

姉たち手伝い東フィル事務局へ

そのうちに、ピアノの姉がオケ中ピアノを弾いていた関係から、確か古田さんというヴィオラの方だったと思いますが、東京フィルハーモニー交響楽団から時間と場所やスタジオなど、要するにオケのエキストラ集めでしょうか、姉宛にたびたび電話がかかってくるようになりました。仕事をしていた姉に対して、私は浪人中で在宅している事が多かった為、ほとんどの電話は私が出ていました。しかし掛かってくる電話がまたいつもなかなか要領を得ないです。当時はマネージャーという役割が、まだきちんとしていなかったのでしょうか。そんな事もあり、急にオーケストラのマネージャーに興味がわき、姉達を伝って、21歳で東京フィルハーモニー交響楽団事務局に入団しました。

東京フィルの事務所は、石膏ボードで有名な吉野石膏という会社が持っていた、倉庫みたいなモルタルづくりの一部屋でした。入団当初は楽団員も多く（男性がほとんど）、ヴィオラセクションは12名ぐらい在籍していました。それから間もなくして、「8チャンネルのカーステレオ」が大流行して、フリー奏者の仕事はひっきりなしで受けられるようになりました。そんな中、稼ぎの良いフリーに転向する楽員が多発し、当時オケの編成はメチャクチャになって、ヴィオラなどは3人しかいないんです。ですからオケのエキストラも大勢集めなければなりませんでしたし、人手が足りないので、営業もチケット係も、と毎日が修羅場でした。

当時は労音全盛の頃で、旅行と言えば1ヶ月近くのものがありました。労音の仕事で毎年九州に行きましたが、2週間くらいの連続の旅になるのです。ですが宮崎労音と大分労音が出演料を払ってくれないという事もありました。演奏会が始まる前は労音の九州委員会みたいなものが博多にあって「演奏終了時に支払う」と約束していても、その二か所は演奏終了後でもまだ支払いが無いのです。そして最後の延岡でついに、頼み込んで、宮崎分を立て替えて払ってもらいました。大分は（事務長的な人が女性でしたが）払ってくれないので、私が労音の役員の方に、「お金が入らないと団員が東京に帰る交通費がない」と言って、やっと払ってくれるのですからすごいですね。そう、オーケス

トラというのは楽隊がいる限りつぶれないんですが、ABC交響楽団というオケは、海外公演でギャラを支払ってもらはず、イタリアから強制送還されてしまったことで解散に繋がった、という事件もありました。

労音の仕事が少し減ってきた頃、今度は文化庁の移動芸術祭が始まりました。これは地方までどんな僻地にも行かなければならぬという事でした。ある時、九州の先、沖永良部島と与論島、沖縄本島でオーケストラをやって欲しいという依頼があつたので視察に行きました。ここではとても思い出になっていることがあります。

自衛隊に楽器運ばせる

当時は沖永良部から与論島を経由して沖縄本島に行く大きな船がありました。しかし沖永良部にはその船が着ける桟橋が無かったのです。さてこれには困りました。人は海上で大きな船から舟（はしけ）に乗り換えて島に入るのですが、どうやったって楽器は船から降ろせないことがわかったのです。そこであれこれ考えました。実は私の父は海軍軍人で終戦後自衛隊に務めていました。その時はすでに退職していたのですが、後輩の一人に海幕の総務課長を務めていた方を思い出しました。そして、自衛隊の船で楽器を運んでもらえないか、父に相談したのでした。そうすると、なんとOKの内諾を頂き、早速文化庁から自衛隊に正式に話を来てもらい、掃海艇に楽器の運搬をお願いすることになりました。

東京に戻り、ひとつひとつの楽器の寸法を測り、全ての楽器分の図面を作り、それを自衛隊に提出しました。自衛隊は提出した寸法をもとに収納場所を事前に決めていたらしく、公演旅行になって港で楽器を自衛隊に預けたところ、そう広くもない船の空き部分に見事にそれらが丁寧にきっちりと並べられ、団員まで乗っても良い、と言われて乗る人もいたりして、それは見事に寸分違わず積み込まれていて感動しました。

無事最後の沖縄本島に到着してやれやれと思ったところ、後の新聞に「音楽団体が自衛隊に楽器を運ばせた」と非難囂々で書かれてしまいました。沖縄では自衛隊と米軍は本当に嫌われていたんですね。もうがっくりきました。では、ほかにどうやって楽器を運べたか、ということですよ。まったくどうしようもなかったです。与論島の教育委員会の人たちなんかは「本当に東京のオケがこんな僻地まで来てくれるのか」とその日まで心配してくださったくらいです。あのころの先生とかそう言う人たち純朴でした。

一千万円、自家用車で輸送

さて東フィルは当時、真言宗のお寺、真福寺という愛宕山のお寺が練習場だったのですが、それも偶然昼食時に通りかかって頼み込んだんです。そうしましたらまたま檀家のいないお寺で、ちょうど建物を改修したばかりで広いスペースが空いている、という事で使わせて頂ける事になりました。

当時東フィルは、「土曜コンサート」とか「おしゃべりオーケストラ」とか3つか4つ、NHKにレギュラー番組があり、NHKから毎月まとめて現金で出演料をもらっていました。その頃のNHKは音楽番組が多くて、NHK交響楽団は「N響アワー」のみ、東フィルがほとんど音楽番組を埋めていました。それでNHK西口玄関の横に小さい窓口があって、「謝金課」という看板がかかっている。そこにお金をいただきに行くのですが、向こうも毎回同じ顔なものだから、すっかり打ち解けました。その場で銀行

の帶を 100 万円ずつ解いては数えるのですが、これがものすごい早さで数えていました。当時のお金で確か月に 800 万円位です。それに多少プラスされてくるので、1,000 万円近くのお金をボストンバックに入れて、自家用車にぽんと積んで事務所に運ぶのですが、ある時思いました。「いま当て逃げでもされたら完全にアウトだな。」でも若さとはいいものです。そんなに大げさなこともなく、毎月通いました。一度私以外の人がいただきに行ったら、東フィルの人間か心配で、ずいぶん時間をかけて調べられたそうです。お金を数えるのは、私も地方公演などの時、当時九州では流通していた 100 円札で来るのを袋に詰め込んでホテルに帰ってしわを伸ばして袋に詰めて運んだのですが、旅行の終わり頃はそれがパンパンになりました。ですから札を数えるのは得意になってしましました。

制作課で 7 億円の売上げ

結局東フィルには 10 年ほどおりましたが、少し違った風に当たりたくて、読売日本交響楽団に移りました。東フィルではとにかく毎日仕事があるし、スケジュールはいっぱいで、電話で依頼が来ても断ることも多かったのですが、今度はその逆でスケジュールがほとんど空いているのです。依頼の仕事がなくてもやっていけるオケだったんですね。それで今度は仕事をすることが主な業務になりました。その差の大きかったこと、仕事を取ってくることが必須です。当時「制作課」という部署でしたが、そこには 2 人しかいませんでした。しかしながらなんとか 7 億円程売り上げることができましたが、それもまた大変苦労しました。

読響には 7 年いました。そして今度は別にマネジメント会社を強く求めたわけでもないのですが、井坂さんがやっているカメラタ・トウキヨウからお誘いがありました。メラニー・ホリディとか、ウイーン弦楽四重奏団、ウイーン歌劇場専属少年少女合唱団など、当時屈指の団体の招聘業務でした。ジャズの秋吉敏子も井坂さんのお気に入りで、全国をずいぶんまわりましたが、小さな会場でのライブ公演もありました。秋吉さんのジャズオーケストラはオリジナル曲しかやらないんです。スタンダートナンバーがないので入りの悪いことも多かったです。それでもルー・タバキンの、サックスのフューチャーはすごかった、ソロを延々と吹いているのです。内心終演時間も気にしていたので「もういい加減、次に行け」と思っても終わらないんです。あれにはまいりました。

プロオケからいわゆる音楽制作、招聘など、マネジメントの仕事も 2 年ほど続けました。私も 40 歳になっていました。またオケの仕事をしてみても良いなと思っていた矢先に、宮城県の宮城フィル（現仙台フィル）から「事務局長として来てくれないか」という依頼がありました。仙台市は政令指定都市になろうとしていて、それは人口が 100 万、プロ野球チームがあること地下鉄があること、など大まかな基準があったようです、その中で「プロオケがある」ということも有利な条件になる、ということで『宮城フィル』を『仙台フィル』にすれば良いというものが市長の考えでした。当時日本で 18 あったプロオケの中で最後に出来たオケで、作曲家の芥川さんが音楽総監督で四苦八苦していらっしゃるのを見ていてお手伝いしても良いかという気になり、宮城フィルに行くことになりました。

仙台で一万円？の新居

2 月の寒い時期に一人で、不動産屋さんに紹介された仙台市郊外の場所を見に行きました。東北は初めてでしたし、道もドロンコで、とても家族の OK はもらえそうもなかったのですが、とてもいい所でした。「10 万円の手付け金があれば買える」とい

うことでしたが、ただ家族には、「あなたは簡単に事を決めてしまうから、簡単に契約しないように」と言われて 1 万円しか持たされなかったのです。ですから不動産屋さんに「今 1 万円しかないけれど」と言うと、「とりあえず 1 万円で、残金はいつでも良いからとにかく空けておきますよ」と言われ、自分で住む場所をほぼ決めてしまいました。帰郷してから、「え～決めてきちゃったの？」なんて家族（といっても妻だけですが）に言われましたが、もちろん後で妻を連れて見に行きました。そこは東急不動産が自信を持って進めてくれたものでもありました、妻はそこがもう寒くて寒くて「どうでもいいから早く決めてしまいましょう」ということでしたので、すぐに家も決まりました。

さて当時のオーケストラの名称は、県が出資しているわけですから、「宮城フィルハーモニー」でした。それでは「とてもインパクトが弱い」ということで市長からの依頼もあり、このオケを「宮城フィル」から「仙台フィル」に名称を変更させてもらえないかを、約半年かけてお願いをしました。県はそんなにお金を出してくれていたわけでもないのに、そうなると変更を済ました。ですからとりあえず、運営母体は『社団法人宮城フィル協会』、オーケストラ名は『仙台フィル』という事で決着しましたが、最終的には私が思ったより大変多くの補助金を市が出してくれることになり、オーケストラも新しく財団法人『仙台フィル』という事になりました。基本財産も県、市を合わせて、12 億円で、基本財産だけは日本で一番裕福なオケになりました。オーケストラの演奏活動も色々なことはありました、どんどん幅広くなりうまくなっていました。結局 12 年仙台フィルにお世話になりました。

オーケストラを離れられず

12 年もいれば自分の中にも垢のようなものがたまります。その頃自分の歳も考えると、また東京に戻りたくなったこともありました、ちょうど再び読響から声を掛けで頂きました。

読響の事務所は中央区京橋にありますが、練習場は川崎市のよみうりランドにあります。最初は京橋だけの勤務でしたが、途中から京橋の管理課と練習所の兼務となりました。本当は京橋とランドと半々にいなければなりませんでしたが、60 の定年までほとんど練習場に入り浸っていました。

定年後は東フィルに二度目のお世話になり、アドバイザーとして再び 2 年程勤めました。これで、東フィル→読響→仙台フィルと移った後、読響→東フィルと一周して戻る事になりました。不思議な縁ですね。

その後ニューフィルハーモニー オーケストラ千葉に誘われました。千葉でももう少し長く務めるつもりでしたが、日本オーケストラ連盟の事務局長に空きが出て、「どうしても来てもらえないか」とお声掛け頂き、断る事ができず、今の「日本オーケストラ連盟」の事務局長ということになったわけです。結局一生オケのお手伝いをして来た人生ですので、最後が「オケ連」というのは自分らしいかなと思っています。

音楽が特に好きだったわけではありません。今も同じです。なぜか離れることができずにここまで来たということです。もうしばらくこうした仕事につけるということが不思議なような気もしていますが、わたしの経験を、という事でしたのでお話をさせていただきました。

2012 年 10 月 25 日 音楽プロデューサー協会例会にて
記録 小林信一（合唱音楽振興会事務局長）

演奏家と聴衆つなぐ深淵

合唱音楽振興会 事務局長／東京混声合唱団マネージャー 小林信一

私は皆さんの前で自分の事をお話できるような事は何もない
ので本当は話をしたくなかったのですが、先日の吉井さんのお
話を聞き、大変興味深く、中身が濃かったものですから、少し
話をしてみてもいいかというふうに心が動きました。吉井さん
のように面白い話はできませんが…。

まずは「東京混声合唱団」（以下東混）についてお話しします。

1956年に芸大の声楽科を卒業した人達が、学内で活動していく『合唱』を「職業にしたら一生関わっていける」という途方もない夢を未来に託して創立しました。ですが始めは仕事が無く「毎日練習してうまくなったら、きっと仕事が来るようになる」という信念で毎日ひたすら練習を重ねていたそうです。当時指揮者の田中信昭さんが合唱の指導をしていたサッポロビール川口工場の工場長で、最終的にはサッポロビールの重役にもなった東大出身の松浦巖さんに、事務局長をお願いしました。林光、間宮芳生などバリバリの新進作曲家に作品を委嘱するなど、すでに今の東混のスタンスが確立していました。

幅のあるマネージャー人生

創設から2年後、松浦さんの本業が忙しくなったため、松浦さんが同じ東大仏文在学中の瀧淳さんを呼び、瀧さんが事務局次長に就任します。1964年には松浦さんに代わり、瀧さんが事務局長に就任しました。その後先日亡くなるまで、瀧さんは東混のために一生を捧げた、と言っても過言ではありません。

瀧さんと東京コンサーツのことを簡単にお話しすると、瀧さんは私にこう言っていました。「合唱団は合唱団員のもの。マネージャーは自分達で別に食べていかなければならない」。そうしたお考えから東混に創立当時から関わっていた指揮者の岩城宏之さんや、東混に合唱曲を書いてくださった湯浅譲二さんなどを筆頭に、作曲家を中心としたマネジメント会社として、「東京コンサーツ（東コン）」を設立し、東混事務局は兼務で仕事をしました。話しが逸れますかそのことが私にとってはとても幅のあるマネージャー人生を送らせてくれたと感謝しています。更に1972年、東京混声合唱団、二期会合唱団、日本合唱協会などを中心に日本プロ合唱団連合を組織して、三善晃さん作曲の「レクイエム」を委嘱初演、NHK交響楽団と共に演じ、職業合唱団というものの知名度を上げるなど、結果として東混の活動に大きな貢献をしました。この年から私はこの仕事を始めたわけです。

先日瀧さんが亡くなったのは自分にとっては一言で言えないほど残念で仕方がないのです。長い間所属していた指揮者の岩城さんは、何かあるとほとんど瀧さんに相談していました。やさしくて、人の心がわかる人でしたが、反面とても怜憐に対応される事もあり、それが東混の防波堤のようにもなっていたのではないかと思います。瀧さんが亡くなって「小林さんの時代ですね」と言う方がいますが、瀧さんは自由に仕事をさせてそれをむしろ鼓舞するほうでしたから、「一番頼りになる人を失った」というのが実感で、すでに私も次代のスタッフを育てるべき時が来ていると思っています。お亡くなりになる前、一人で面会に行ったのですが、「君は上田の出身か、真田幸村でいいじゃないか。小国を守ることの方が本質をはずさない生き方ができるよ」と励されました。この会ではまずどうしても瀧さんと

いう人のことは話しておきたかったのです。

さて、私は昭和24年、長野県上田市で生まれ、古い商業の町、稲荷山（以前更埴市。現在は千曲市）で育ちました。子供の頃から映画と音楽、それに読書が好きでした。特に映画は小学校に上がる前は年に数十本観ていたと思います。昼間は母と、夜は父と見に行くなど1日に2本観る日もありました。当時の大映、東映、松竹などの黄金期の作品は今も記憶に焼き付いています。小学生は映画を観てはいけないのですが、隣町まで行って観たり、年に数回の「ショー」（今から思えばおそらくストリップショーですね）のダンサーの帰り道を友達とひとつしかしない町の旅館の前で待ち伏せしたりしたことありました。ドレスの原色が美しかったのをはっきりと覚えています。カラーではないすべてモノトーンの時代でしたから。

できたての大学に入る

音楽や歌は大好きでしたが、学校の音楽の成績はよくありませんでした。それは高い音が出ないということからです。ですが当時低音の魅力と言われた「フランク永井」の歌などは暗譜していました。合唱は東京少年少女合唱隊の学校公演で聴いたのが最初です。講堂いっぱいにグレゴリオ聖歌が流れた瞬間の驚きは忘れられません。中学の時の先生が「音楽することは歌うことだけではない。聴く事や、作曲、音楽の歴史を研究することも音楽の学習だ」と言ってくれたのが励みになりました。そして漠然と将来音楽をやっていきたいと思いはじめました。

地元の大学を出て音楽教師になれるかなと思って、たまたまレッスンに付いた東京の先生が、岡山県の山の中に音楽大学（作陽音大、現くらしき作陽大学）を創るという話をしてくださいり、先生の『作陽音大で合唱団を作りたいので男子学生が必要』という言葉が決め手となり、できたての大学に入学しました。学生時代から合唱団で演奏旅行などもしていましたので、その時の経験は今の仕事にも役立っていると思います。

1972年、卒業して東京に出てきました。始めはソロや合唱で歌うことのアルバイトをしていました。ドリフターズのテレビ番組でバックコーラスまでやりました。NHKでは仕事の合間に大河ドラマの撮影を覗いたこともあります。

東京芸大の近くの谷中に（まだ勉強を続けたい気持ちもあって、芸大はただでピアノ練習室を貸してくれる、といううわさがあったので）、3畳一間の木造アパートを借りて住んでいましたので、休みの日には芸大に潜り込んでピアノに触れ、歌のレッスンも続けていました。73年、先程の瀧さんに事務所の近くの昼飯屋で、「正式に東コンの事務員として採用しよう。合唱団のこととマネジメントの仕事の両立を図るように」と示唆されました。後にも先にも瀧さんと昼飯を共にしたのは、この時だけです。

初仕事はエキストラ集め

初めの仕事は合唱のエキストラ集めでしたが、芸大に潜り込んでいたおかげで、歌い手が芸大のどこにいるのか、ほとんど把握できていましたので、芸大に行って歌い手に声を掛ける事で、簡単にとても優れたエキストラを集めることができました。

中には今でも親交のある人もいます。岩城宏之さんのN響での旅行の随行という仕事も何度かありました。

なかでも作曲家の武満徹さんは、事務所に来ると必ず私の前にいらして映画の話で大変盛り上がりました。武満さんが映画をこんなにも愛している、ということは驚きでした。「最近はどんな映画を観た?」などというきっかけから始まるのですが、ある時私が高校時代に観た「シベールの日曜日」の話になり、その作品は武満さんのベスト作品であることを知りました。武満さんは戦時中の17歳の時に、始めて西洋音楽を聴いたそうです。それはフランスのシャンソンだったそうです。また戦後、進駐軍が聴いていた音楽を聴いた時に、まったく聴いた事がない音楽で、17歳で聴いたシャンソンと共にとてもショッキングなことだったそうです。そうした中で武満さんは、「音楽家(作曲家)になりたい!」と思ったそうです。そんな話もよくお酒を飲んで話されました。あの少し鼻にかかる厳しくてやさしい声で。

武満さんがアンコール曲

武満さんの曲をプログラムに入れると、ご存命の頃より今はたくさんお客様が入るんです。不思議なものですね。武満さんが東混定期公演のプログラムを見て、「こんな難しい曲ばかり聴いてお客様を帰すのはわいそうだから、エチュードのつもりで僕のいくつか創った歌を定期のアンコール用に編曲してあげよう」とおっしゃってプレゼントしてくださったのが、武満さんの「歌・ソング」という合唱曲です。先日この曲を含む「武満徹の全合唱曲」の演奏会を、東京と名古屋で開催しました。どちらも満席でした。

東混の主な仕事(演奏会)は、この日本人作曲家の合唱曲を入れた定期演奏会、地方への通称「売り公演」、そして文化庁が74年ごろから続けている「子ども文化芸術体験事業」の、三つが主な仕事です。年間100ステージは公演しています。昔はこれに加えて、テレビ局の収録、録音の仕事が多くあり、以前はそれでかなりの収益を得ていましたが、最近はあまり多くはありません。たまにはAKB48のバックコーラスの仕事なんかも飛び込んできますがまれです。

海外公演では、日本ではまだ評価されなかった柴田南雄「追分節考」などの日本の作品を紹介し、大絶賛されました。海外では日本の現代合唱曲はとっても受けるんです。90年代から松原千振さんの指揮で、5回ほどヨーロッパを中心とする海外公演を行っています。ですが、最近は文化庁の海外公演に対する経費の扱いが厳しくなり、難しくなりました。海外にすばらしい日本の曲をもっとたくさん紹介できるのになあ、と残念に思っています。

30年前から合唱や東混の状況はほとんど変わっていません。やっていることに対しては、サントリー音楽賞などを受賞して評価していただける事もありますが、東混の運営は本当に大変です。1966年に発売された雑誌に東混の事が書いてある記事を、最近見る機会があったのですが、全く状況は同じでした。そうした中、財団法人合唱音楽振興会を設立しましたが、財団の問題はまた後日にまわします。国の予算をいただくことは皆さん苦労しています。オーケストラは「オーケストラ連盟」を作ることによって、文化庁への予算要求を組織的に行っています。東混も楽器を使わないだけで同じプロの音楽団体なので、「オーケストラ連盟に入れて欲しい」と考えていますが、無理でしょうか。

一方で高い評価を得ながら本当に運営は大変です。長い間この業界にいらっしゃる藪田さんやマネジメント会社の皆さんと、今までほとんど仕事を一緒にすることが無かったのも、やはり立ち位置が違うというか「若干違うジャンルにいる」ということなのかな、と思っています。

マネージャー論、未だ書けず

瀧さんには40年前から、「マネージャーというものがどういうものか、『マネージャー論』を書いてみたら!」と言われていました。しかし未だに書くことができていません。音楽大学では音楽マネジメントを教える学科もできているようですが、大学で簡単に教えられるような事でもないでしょう。否定するのではないのですが、少なくとも、この仕事は飛び込んでみて初めて、仕事の深淵も理解できるのだと思います。

それはさておき、私はマネージャーというものを一言で規定するとすれば、「あらゆる側面で何かと何かの間を行ったり来たりする」、例えば「演奏家と聴衆をつなぐ役」なのかな、と思っています。そこにはお金も思想も全て関係します。合唱団と聴衆の為に、一生懸命やってきて、気がつくと40年近くも経っていました。今まで東混をやめようと思ったり、転職しようと思ったりしたことは一度もありません。必死にやっているだけで、そんな事を考える余裕も無かったです。これからはただ必死にやっているだけではない。国の文化予算を少しでも増やす、というようなことにも携わらなければいけないし、若手を育てるということもあるし、実にまだ途上にあるということでしょうか。

長くなりましたがこのあたりに致します。ご清聴ありがとうございました。

2012年12月12日 音楽プロデューサー協会例会にて
記録 丸田朗



毎月行われる例会の様子

音楽界背負う人の苦労

音楽プロデューサー協会 代表幹事／東京アーティスト代表 中根俊士

1948年（昭和23年）2月11日、埼玉県の東松山に生まれました。父は日本国有鉄道、鉄道技術研究所の技師で、当時は浜松町の職場から週末だけ東松山に帰っていましたのだと思います。その生活を続けるのは大変だから、ということで、私が2歳になった頃、三鷹の国鉄官舎に引越し、そこで中学、高校と過ごしました。1966年3月に新宿の成城高等学校を卒業し、1年浪人して東洋大学経営学部に入学しましたが、大学では勉強は余りしたことなく、ギタークラブに入っていました。2年生の時にクラシックギターのクラブをつくろうという話が持ち上がり、卒業するまでそのクラブを運営していました。そういうことで、当時から「マネジメント」というものに少しは興味があったのかなと思います。

当時はあまり景気の良い時代ではなく、卒業する1970年の秋、たしか11月頃にクラブの演奏会を行うので、就職活動はしていなかったんですね。本当は音楽関係の仕事に就きたかったのですが、その演奏会が終わる頃には、どの会社も試験が終っていました。

当時良く行っていた吉祥寺の新星堂というレコードショップの店長が「音楽之友」の黒沢幸男さんを知っていて紹介してくれたのですが、その年の採用は終わっているということで、でも、それはそれでいいやと思ったのです。それで就職は学生時代にアルバイトをしていたワイシャツ屋に入ることにしたのです。

その後、卒業直前の12月に黒沢さんから電話があり、暮れにアルバイトに来ないか？と声を掛けられたのですが、ワイシャツ屋も暮れば忙しく、アルバイトに行くことになっていたのでお断わりしたのです。その時に断わってなかつたら、もしかしたら「音楽之友」に入社していたかもしれません。

3ヶ月で転職

大学卒業後の4月からワイシャツ屋に勤務しましたが3ヶ月で転職しました。というのは、国立にアポロというレコード屋があって、その店主も吉祥寺の新星堂についてお世話になっていたのですが、この方から「お前は音楽事務所のようなどころが向いているから」と求人を出していた榎本音楽事務所を紹介してくれました。

その時、面接をしてくれたのが藪田さんでした。榎本さんは就職の時に姓名判断をしているので、そこでは一応通っていたと思うんですよ（笑）。

そういった経緯があって、7月一杯で辞め、1971年8月1日に榎本音楽事務所に入社しました。

東京進出間もない榎本音楽事務所に

その頃、榎本音楽事務所は銀座の資生堂パーラーの裏手、出雲ビルに入っていました。私が71年に入った頃は、エレベーターガールがいて、蛇腹の扉を開け閉めしてくれる、そういう時代でした。

社員は藪田さん、経理の金尾さんという男性、今オクタヴィアにいらっしゃる平井さん（平井さんは私が入社した2年後、フィリップスに移り、その後ボニーキャニオン）。平井さんの後に私が入社し、他に女性が2人、全員で6人でした。

当時、榎本は東京に進出してそれ程時間が経っていませんでしたから、会社の経営も大変だったと思います。関西では、1970年にベートーヴェン生誕200年の仕事をしたり、大阪万博の仕事をしたり、基盤はしっかりしてきていたけれど、東京ではまだたいしたことがないという状態でした。ただ、段々仕事が増えてきたので、もう一人入れようということで私が採用されたのです。

その後、徐々に会社の状態も良くなっていき、日本人演奏家の契約も増えてきましたが、外来演奏家は新芸術家協会、それから神原音楽事務所のようにピューラー音楽もやっていた会社には、招聘の質や量では敵わなかったのではないかと思います。特に新芸術家協会は断トツに強かったです。榎本はまだオーケストラも招聘したことがなくて、室内アンサンブルがせいぜいだったと思います。

入社した翌年あたりだったと思うのですが、10月にルイ・オーリアコンブ指揮、トゥールーズ室内管弦楽団を招聘する予定でしたが、8月にオーリアコンブが脳腫瘍を患い来られないということになったのです。榎本としては初めての大きなキャンセルになるかならないか、ということで、藪田さんも右往左往するような状況でした。

最終的には演奏会自体は予定通りで、指揮者なしで行うことになったのです。オーリアコンブという指揮者が来られなくなったので、誰かが「出し抜きこんぶですね」なんて冗談を言って笑つたけれども、一時はどうなることかと思いました。トゥールーズ室内管弦楽団は真面目な良いアンサンブルで、キャンセルにならず、演奏会が出来て良かったなと思いました。

今では百戦錬磨の藪田さんも、その当時はキャンセルということに対しては、どうしたらいいのか分からぬと言った状況でしたが、その内には「生きている人間を扱っているんやから、そんなのしゃーないやろ」みたいな風になっていくのですから、人間の慣れというのは恐ろしいなと思います（笑）。

渡辺範彦 荘村清志

演奏会のキャンセルのことと言えば、私が入社して2年目か、3年目くらいだったと思うのですが、その頃の東京文化会館は音楽事務所に対して月に何日貸すというシステムで、今のようにアーティストを評価して貸す、というシステムではなかったのです。ですから、演奏会がキャンセルになってしまったときに、そのままホールを返却すると音楽事務所の実績として響いてくる、というような状況だったのですね。そのような中、9月初旬に小ホールを借りていたのですが、演奏家に何かがあつてキャンセルされてしまい、代わりに何をやるか会議をしたことがあります。4月か5月くらいだった思います。

藪田さん、金尾さん、平井さんと私。4人でいろいろとアイディアを出し合ったのですが、なかなか良いものが出てこない。それで、当時のギター界では双璧だった渡辺範彦と荘村清志の二重奏をやろうという案を出したところ、それはいけるかもしれないということになりました。

出演料はどちらもウン万円。これ以上要求してきたらこの話は無し、ということで動き出した。荘村さんはマネージャーがついていたので直ぐに連絡が取れてすんなりと決まったのですが、渡辺さんはどこに電話しても連絡が取れない。今のように携帯電話もない。最終的に明日上野学園に来るということが分かって、そこで待っていて交渉したんです。それぞれソロを弾いて最後にデュオを。出演料はウン万円でと。

双方ともその条件をのんびり演奏会を準備し始めたのですが、7月になってもチケットが300枚位しか売れない。藪田さんからも「どないしますんや?」とせつつかれて、銀座ヤマハで記者会見のようなことをやったのですね。その記事が8月下旬に掲載され、それからバタバタと売れてしまった。今度は「オーヴァーセールしているんちゃうの?データとってんねんかいな?」と言われ「そんなものとっても、こんなに急に伸びてしまって止めようがない」と返したのですが(笑)。結局は650席のところ700枚も売ってしまい、当日はお客様には怒られ騒然としたのですが、経理の金尾さんが「表はワシに任せとき、あんたは裏だけやっておけばいいから。良かったな、満員になって」と言ってもらった。お客様にはお詫びして返金しました。

藪田さんはNHKの録音をテープからカセットにおとして「これはご褒美やで」と後日渡してくれたのを覚えています。金一封のかわりのやうなものです(笑)。

小澤征爾との契約

梶本さんは72~3年くらいに小澤征爾さんの仕事を引き受けたのです。

当時、アーティストを担当するのは平井さんと私しかいなかつたので、私が小澤さんの担当になったのですが、その頃は、3月、6月、9月、12月と日本に帰ってきて、その間は朝は8時頃には家を出て、夜は12時半とか1時に帰宅、そんな状況でした。様々な仕事が大きく動くようになり忙しかったのですが、小澤さんはまだ38歳くらい、梶本さんは48歳くらいで、私は25歳くらいでしたから、皆、元気な時代でした。

小澤さんの仕事をすることにおいて、アメリカのコロンビア・アーティスツとのつきあいが非常に深まってきて、梶本さんはそこからアメリカの音楽事務所のやり方を学ぶのですね。

1975年にサンフランシスコ交響楽団／小澤征爾を招聘したのですが、これは梶本では初めての海外オーケストラの仕事でした。まず東京に入り、博多に移動し、小倉、広島、京都、大阪、神戸、それから、長野、藤沢、東京。そして最後に札幌。

このときは何もかもが初めてで、向こうから言ってくる楽器のサイズも分からぬ。楽器そのものの重さはたいしたことはないけれど、ハードケースに入っているし容積をとられてしまうから、トラックを何台用意するかという問題が出てくるわけです。最初

にジャンボジェット機から楽器を乗せ替えて博多に行ったときに4トントラック2台とバゲージ用のトラックで見積りましたが、実際はトラック2台では収まらず、バゲージ用を含め4台のトラックと4台のバスになりました。やはりコントラバスが大きく場所を取ってしまうし、衣装もケースに入って届けられていたので、その荷物のことが相当大変な仕事でしたね。

初めてのオーケストラの旅だったし、興行的には小澤さんということで全て完売したのですが、何から何まで初めてのことでの貴重な経験だったなと思います。

ツアー中に印象的だったのは、移動する時の集合の仕方です。

アメリカのオーケストラは皆そうなのですが、例えば朝8時に出発の場合、8時前にバスが4台来ているんですね。満員になつたバスから出発する。それが8時前でもバスを出してしまうんです。最後の1台だけ8時1分くらいまで待つのですが、それで出してしまう。点呼なんか誰も取らない。遅れた人はタクシーで来ればいい。どうやってでも自分で来いというやり方。それは大人の世界というか、これでいいんだなと思いました。

アメリカ・ヨーロッパに約40日

その前年だったと思うのですが、新日本フィルが出来て、アメリカ・ヨーロッパに旅行したんです。その時に、小澤さんが「君はこの仕事をやるのだったらアメリカとヨーロッパは見ておいた方がいいから」と連れて行ってくれたんです。約40日のツアーでした。

その頃は1ドル360円でしたし、飛行機も高かった。それで、梶本さんが新日本フィルに「うちの中根を出向させますから、給料はうちが持りますが、経費はそちらで持ってください」と(笑)。当時のことですから、100万円くらいかかるんですね。その後ことあるごとに「お前が来たから100万も余計に掛かっているんだ」と当時のステージマネージャーの方に言われたのですが、私に言われてもね…(笑)。

その旅の話が持ち上がってたとき、レコード芸術の編集長から電話がかかってきて、うちに来ないか?と誘いを受けたんです。給料も良いし、最初は移っても良いかなと思ったのですが、1ドル360円の時代、外国になんか次にいつ行けるのか?と考えて梶本に残ることを選んだ訳です。まさかこんな時代が来るとは思わなかったからね(笑)。

そのツアーでは、ホテルに着くと小澤さんから必ずホテルから会場までどのくらい掛かるかを確認しておいてくれと言われました。あまり大きくはない都市にも行きましたが、小澤さんもまだそれ程ヨーロッパに行っていなかったのだと思います。トロントからサンフランシスコに移ったばかりで、アメリカでの活動が中心でしたから。

その後、ボストンに行くわけですけれど、人気とともに多方面から注目を集めています。ですから、日本に帰ってくると取材の依頼が来て、それを断るのが仕事の殆どでした。

その時に梶本さんから教えられたことは、次に連絡をいただいくても絶対に対応できないとしても「また頼んでくるように断わらなければあかんよ」と言うんですね。「折角お電話をいただいたのですが、もう既にスケジュールが一杯で、本当に申し訳ないの

ですが、次回なんとか…」そういうような断り方をしなさい、と。

こう言ったことに関しては、非常に厳しい教育を受けました。何か一つでも間違うと直ぐに「キミ！」と呼ばれて怒られるのですが、そういうところがあったからこそ、今こうして仕事が出来ているのではないかと感じています。

当時「カジモト音楽事務所はケチモト音楽事務所」なんて言われて、電話を切るときも受話器をゆっくりおくのではなくて、受話器を置くところに手を添えておいて即きりなさい、ということをやっていました。その間に 10 円上がったらどうするというような会社だったんです（笑）。

でも立派だったのは、50 周年の時にパーティを東京と大阪で何百人も招待して開いたのです。会場案内をしてくれていた“日比谷のおばちゃん”から呼んでいるのですね。お世話になった方を隅々まで呼んだ、というのが立派だったと思うのです。

そして、会場に行ってみたらビールではなくシャンパンなのです。ずっとシャンパンしか出てこない。本当にこれが梶本のパーティか？と思いました（笑）。使うべきところではものすごい使い方をする。



例会では茶菓子とペットボトル

入社した年に 3 回喧嘩

藪田さんは“瞬間湯沸かし器”と言われていて、1 年目で 3 回喧嘩したんです。

最後の喧嘩は、銀座の山野楽器の前。その時に梶本さんが東京に来ていた、銀座の第一ホテルに呼ばれて原因を訊ねられました。それで「辞めるのか？」と訊かれたのだけれど、その前のワイシャツ屋も 3 か月で辞めているし、1 年足らずで 2 度も会社を辞めるのは具合が悪いなと思ったので「もう一度やり直します」と言ったのですが、今でも私は間違っていないと思っています（笑）。当時、私はまだ 1 年足らず。藪田さんはもう 10 年以上梶本にいるのだから、どちらの言い分を取るかといったら、やはり 10 年以上いる人の言い分の方が正しいと梶本さんは判断するだろうから、この際仕方がないと思って折れたのですが…。

もう 1 回は、東京文化会館・小ホールの楽屋裏。もう 1 回が何処だったか思い出せないのですが、3 回やったことは間違いない（笑）。

梶本を辞めた後に、「会長、今まで辞めた人間が残っていたら、すごく強力な会社になりましたね」と言ったことがあるんです。「残った人間は文句を言わない去勢されたような人間しかいない。これではやはりだめなのではないですか？」と訊ねたら「ああ、そうか」と言っていたけれど（笑）。でも、会社というのは、そうやって御して行くのが良いのかもしれないし、八方破れのような者がやっていくのが良いのかもしれないし、それはどちらとも言えません。どちらが正しいか答えは出てこないと思います。

梶本を退職、株式会社高柳音楽事務所へ

その後、結局梶本を退職し、「アポロ」に約 1 年半勤めていましたが、レコードといつても、ポピュラー音楽はさっぱり覚えられないし分からない。面白くないと感じていたとき、いろいろな方が「うちにこないか」と声をかけてくださいました。その中で、最初に声をかけてくださった高柳さんのところに行くことにしたのですが、それは、招聘しているアーティストも素晴らしかったから。しかし、入って驚きましたね。借金はあるし、梶本音楽事務所と違って減茶苦茶でしたから。

梶本では毎月のように「音楽の友」から「何枠おとりすればよいですか？」と電話がかかって来たのにかかるべくない。それはそうですよね。広告料を払っていないのだから…（笑）。その他にも、毎月のように印刷屋の社長自らが「今月はお幾らお払いいただけますか？」と取り立てに来る。要するに、払わなくて済むところは払っていなかったわけです。

高柳さんは「俺は給料の遅配をしたことはない」と言っていましたが、それはそうですよね。印刷屋の支払いはせずに給料にまわしていたのだから（笑）。私が一番心配したのは社会保険の支払いだったのですが、それはきちんと払ってくれていたんですね。だから今、厚生年金をもらっているのですが、そこは偉かったなと思います。

その時に思ったのは、借金というものは督促を多くした人のとこ

ろに支払われるのですよ。借金している人は弱い人間だから、何回も催促するところから支払うのですね。借金を取るのがうまい人というのは嫌でも何度も催促をする。これをやらないと借金というのを取れないと学んだわけです。

そういったこともあり、最初は大変なところだなと思ったのですが、招聘している内容が良いので、大阪の梶本にいた佐野という男性に東京に来て一緒にやらないかと誘ったところ、面接に来たんです。

高柳さんは面接もいい加減で「やりたかったら来てやればいいだろう」とろくに話も聞かないで決まった。それどころか、その時ついてきていた佐野君の大学時代の後輩で河村君というのも「君も来るか?」と採用したのです(笑)。

その後、その3人で楽しくいろんな仕事をしましたね。セールスもするし切符も売る。

高柳さんはいい加減なところはありましたが、僕らが良いものを見つけてきて「これをやりたい」と言うと「やってみなさい」と言うんですね。幾らかかるのか訊ねられますが、それ以上の検討とかかるさいことは言わず「やってみなさい」と言うんです。それで黒字になったら次もやって良い。赤字になったらそれで終わり。言ってみれば博打打ちでした。音楽事務所でああいうタイプの人には他に会ったことがありません。

佐野君と新会社を立ち上げ

高柳さんは、非常に面白いところがあったけれど、やはり、お金が入るようになると状況が変わります。欲が出てくるといろんなことを言ってくるようになるから、段々と我々が思うようにやっていけなくなってしまったところが出てきました。そして、意見の違いから会社を辞めることにして、担当していたアーティストを何人も連れて、佐野君と一緒に株式会社ナサ・アーティスツ・ビューローを立ち上げました。1981年のことです。

佐野君というのは梶本さんが30年かかってやったことを3年でやろうとしていろいろな博打を打った。彼が言うには、何か大きなことをやらなければだめだと。

ですから、1985年、広島原爆40年目に「広島平和コンサート～世界巡礼の旅」をレナード・バーンスタインを音楽監督として呼んで行なったのです。

けれども、彼の企画はお金が集まると思ってやっても全く集まらなくて、大きな赤字を抱えてしまった。彼の発想というのは、何でも儲かることが前提で物事が動いていました。ですから、儲かったときに税金を払わないように経費をどんどんと使ってしまうと。しかしそれでは駄目だったのですね。でも、いつもダメかというとそうではなくて、10に1つくらいは成功があるから、一概にはダメとは言えないところが彼の個性でもありました。

そのようなことが何度もあり、3年くらいでその会社はダメになってしまった。

彼は、その後もバーンスタインとは付き合いがあり、札幌でPMFをやるようになった。PMFは彼がいろいろなことを仕掛けで成功したのだと思いますが、今、彼の名前は全く残っていない。それは残すべきだと思っています。

ナサを辞めたときに梶本さんに「今度は、君はうちに戻ってきてくれると思ったのだけれど」と言われたんですね。でも「もう私はいまさら梶本みたいな厳しい会社の仕事はできません」と答えました。辞めてからは日本アーティストでお世話になることになったのですが、ここも最初に入ったときは非常に厳しい状況でした。

そこで、私は日本人のアーティストを何人も担当して、仕事を増えてきて、そのうちにブーニンが亡命し日本アーティストに。それからは羽振りが良くなりました。

日本アーティストで10年くらい一緒に働いたのですが、やはりお金が出来ると、不満や自分の言いたいことが出てくる。日本アーティストでは、寺田さんと私と、もう1人経理をやっていた西塚さんという3人が取締役だったのですが、私と寺田さんとはやっていた仕事が全く違っていたので、3人で会社を分けることにしたのです。喧嘩して辞めてしまうより、そうした方が良いと西塚さんの提案でした。

私は退職金という形でお金をもらい、彼らは2人でそのまま続けるということになり、私はその時の資金を使って今の会社を作ったのです。1995年6月のことです。

音楽祭との関わり

木曽音楽祭は10回目から手伝うようになりました。最初は全員の素人がマネジメントをやっていて、久保陽子さんと金昌国さんから手伝ってもらえないかと相談されたのがきっかけです。

その年は朝比奈隆先生もいらして演奏会をやったのですが、内情はいつ潰れてもおかしくない状況で、細かい話をするとこれだけで話が尽きてしまうくらいに、いろいろなエピソードがあります。

その年も結局赤字は赤字だったのですが出演料を辞退してもらい、なんとか収まりましたが、これで音楽祭もおしまいだと思いました。しかし、次の年の5月くらいに町役場の総務課長が訪ねてきて、10回やった音楽祭を潰すわけにいかない、町で引き受けるからまとめてくれないかと依頼され、11回目から正式にやるようになりました。

木曽音楽祭と同じ年に始めた「ゆふいん」が35回で終了して「清里」は30回。木曽音楽祭は来年40回、役場の若い人たちはずっと続けるんだと意気込んでいます。お蔭様で、お客様はわりと入っていますし、内容としても評価されていますから、続けようと思えば続けられないこともない。ただ、出演者の新陳代謝と、一番考えなければならないのはマネージャーかもしれません。どなたか、私がやりたいという方がいたら…と、思いますけれど(笑)。

アーティストたちと

東京アーティスツを立ち上げる前にはいろいろな節目があったのですが、やはり大きなことと言えば、日本アーティストにいた頃、1990年に白井光子というアーティストを紹介してもらったことです。

紹介してくれたのは、CDの輸入をしていた東京エムプラスの

宮沢さんという社長さんでした。

宮沢さんはレコード芸術の編集長をやっていた石川さんに相談したところ「中根が良いのではないか」と言われたそうで、目黒で一度お会いしました。白井とも「プローベのつもりで一度やってみましょう」ということになり、1992年4月に石橋メモリアルホールを含む5箇所で演奏会をすることになりました。

演奏会中止、保険でカバー

ところが、白井は演奏会直前に行ったウィーンで風邪をひいてしまい、ガラガラ声で「このままでは歌えない…」と電話がかかってきたのです。その後も毎日電話がかかってきて、3日目くらいには「冬の旅を歌ったら、途中で咳き込んだけれど、最後まで歌えました」と言われた。しかし、そんな状態で歌っても今までの評価が下がってしまうので、今回は中止しましょうと話しました。

その時は保険に入っていたのですね。その当時は、今のように皆が保険に入るわけではなかったのですが、たまたま高柳さんの事務所の先輩が保険屋をやっていて、そこに入ったんです。

3回ある演奏会の内、1回はもう既に日にちが足りなくて入れなかつたのですが、後の2回分は入ることが出来て、約3年掛かつて保険金がありました。

ちょうどその頃、浜離宮朝日ホール支配人の志村さんと知り合い、浜離宮で白井のリサイタルをやることになった。プログラムは新ウィーン楽派でウェーベルン、ベルク、シェーンベルク。当時まだ付き合いが始まって間もない頃だったので、当時副支配人をやっていた桜井さんと言う方に「300枚くらい買っててくれる?」と言われ「そのくらい買いますよ」と言ったのですが、先方からもう1日待て欲しいと言われてしまった。「志村さんが買ってくれないのなら保険金を使って手打ちでやろう」と話していたのですが、結局、志村さんから電話がかかってきて「中根には敵わないよ」と言って買ってくれたのです。それで400枚売ったら、そこでまた怒られる…。「おまえまだ新聞の告知も出していないのに、なんで400枚も売ってくるんだ」と、何をやっても怒られる(笑)。

白井とは、そういう付き合いがずっとあったのですが、実は当初私は歌のことは全く知らない、マネジメントを引き受ける際、二期会のOBや詳しい人に聞いてみると「あんた、アホちゃいますか? 白井光子なんかマネジメントさせてくれと言ったって、させてもらえませんよ。それが向こうから頼まれたのであれば、やらなくてはなりません」と言われて、「ああ、そういう人なんだ」と(笑)。

最初の演奏会がキャンセルでしたから、白井から「歌手は嫌でしょう?」と言われたのですが「まだなにもやっていませんから、これからやりますから」と言って以来ずっと付き合ってきています。

人生は思い通りに行かず

長岡純子というピアニストも、95年に高柳さんのところが潰れて引き受けことになったのですが、この人も偉大なピアニストでした。1928年生まれで、クロイツラーに師事。亡くなる直前の2010年12月12日に最後のリサイタルを津田ホールで開き、NHKテレビに収録してもらい本当に良かったと思います。彼女に対する最後のご奉公でした。

2009年の秋に野島稔のマネジメントを引き受けたのですが、野島は全然弾かない(笑)。「僕はピアニストと言っても余り弾かないから」と言ったけれど、余りではなく、全く…(笑)。

しかし、野島稔は権本にいた頃に担当していたので、自分としてはこの演奏家の最後の仕事をしてみたいと思っていましたから、そのうちに弾いてくれれば良いなと思っています。月に3回くらい弾いてくれるとこちらとしても楽なんだけれど、人生はなかなか思うとおりにいかないなと思っています(笑)。

<後日付記>

今まで仕事をやって来た中で、会社経営にとっても評価としても助かった事は、やはり、海外からの演奏家に恵まれたと言う事があります。ヴァイオリンのジョルジュ・パウク、チェロのアンナー・ビルスマ、テノールのクリストフ・ブレガルディエンと言ったところは非常に助けてくれました。ビルスマが主宰している、ラルキブデッリと言う弦楽三重奏団を呼べた事も誇りに思っています。

毎年恒例の名刺交換新年会



音楽プロデューサー協会設立のきっかけ

日本アーティストにいた頃、音楽事業者協会の理事の仕事もしまして、そこでまた梶本さんと仕事をする機会を得て、梶本音楽事務所以来、懇切丁寧にいろいろなことを学びました。梶本さんの推薦で、FACP というアジア圏のマネージャー協会にも行くようになりました。

2000 年 4 月に音楽事業者協会を社団法人化しよう、ということになったのですが、正直なところ、私も賛成ではなかったし、家永さんも賛成ではなかった。だが、そういう方向に進んだのです。

音楽事業者協会は、作曲家だと、評論家だと、いろいろな方を理事にしなければならなかったんですね。そういうわけで枠がないからと、事務局長として社団法人化するために動いていた家永さんは理事を辞めなければならなかった。それで設立したのがこの音楽プロデューサー協会なのです。家永さんは一見柔らかい雰囲気の方だったのですが、一本芯が通った骨のある人でした。

ちなみに、そういうことがあるから、きっちりとした丸田さんは気に入っていたんですね。家永さんが亡くなった時には、葬儀屋から連絡が来たくらい。そういう重要なリストに入れてあつたんですね。

家永さんが事務局長と代表幹事を務めた後に、丸田さんと私が引き継いでいるのですが、今後の方向性をどういうふうにしていったらいいのかな、という課題があります。義務のようにやらない方がいいと思っているのですが、皆さんいろんな考え方があるから、それはそれでしかたがないのかな、と思います。

梶本 OB 会

私のように、梶本音楽事務所を辞めた人間が、東京と大阪にくさんいたものですから、1996 年 2 月に梶本音楽事務所の OB 会を名古屋のセンチュリーハイアットで行ないました。東西の OB が集まり、梶本会長もご夫妻でいらしてくださりとても喜んでくださいました。

80 歳の誕生会には、東京の幹事の私と大阪の幹事の黒川さんを夫婦でご自宅にご招待下さり、新幹線の往復チケットまで送って下さいました。

その後、2003 年に神戸、2006 年に東京でやったのが最後だったのですが、そんな縁で梶本会長と藪田さんには長年お世話になり、この仕事を続けてこられたのかなと思っています。

自分の生きてきた道

自分としては、セールスがあまり得意ではないので、できたら、アーティスティックに演奏家にアドバイスできるようなマネージャーになれればいいなと思っていたのですが、こういったやり方は、個人事務所だから出来ることで、会社に勤めていたらそうは行かないのだろうと思います。

利益は上がらないが、仕事に対して自分はこうだと思ったら、周りの意見に流されずに行動しているところがあると思います。

これは言ったら損するだろうなということも臆せずに言ってい

るから、そこで損しているのだろうなと思う反面、腹を割って話をしても良かったのかなと思うこともあります。音楽家の中には我々が何か言っても「音楽教育を受けていないから」と取る人もいます。音楽学校を出ているわけではないじゃないか、と。でもそういう人の意見もきちんと聞く音楽家もいるわけです。音楽家とマネージャーというの立場も違うわけですから、自分はどういうことを目指していくかというのが分かっていれば、音楽家ともうまくやっていけると思う。

政治に関しても自分なりの考えがある。でも、その「考え」が出てきたのは 40 代の中頃からだったのかなと思います。それまでは、政治に対して特別の考えはありませんでした。

そういう自分なりの考え方をはっきりと持つということは大事なことだと思うし、政治や経済に関しても、仕事をやっていく上ではある程度理解していかなければならない。全てを理解しているわけではないけれど、ある程度動向が分かっていた方が良いということは感じますね。

それと、仕事をしていく上で大切な事は、人に覚えてもらうことです。これは大事だと思うんですよね。品川に事務所を構えて 20 年近く経ちますが、不思議なのは一度も入ったことがない床屋のオヤジが、会うと毎日挨拶するんですよ（笑）。これも何かを印象づけているのでしょうか。逆に相手に印象づけられているのかもしれません。そのうち店に来るようになります。

普段は粗野だが、正式にはきちんと

私は、普段粗野な話し方をしますが、音楽家と会ったときには、やはりきちんとした話し方をするし、服装もきちんとした格好をして行きます。

外国人と話すときは、通訳を介していても、お金を払っているのは誰だというのを印象づけるような話し方をする事です。「通訳は言葉を訳しているだけであって、お金を払っている人にきちんと話をしなければ通らない」というのを分からせる。ですから、アーティストは皆、私に理解してもらおうと思うわけです。外国人の立場に立って話す通訳がすごく多いけれど、依頼する側はそこをきちんと分かった上で使っていかないと駄目だと思います。

小学校の頃は意気地のない、学校に行つても発言をしないような生徒だったのですが、どこでどう変わったのか、言わなくともいいようなことまで言って、月の出でない晩は後ろから刺されるような言動をしてきたのですが、…（笑）。でも、良い時代に良い仕事ができよかったです。自分にもアーティストにも記憶に残る仕事が出来たと感謝しています。

いま音楽界は厳しい状況が続いている。これから音楽界を背負っていく人達には我々とはまた違った苦労があるのではないかとは思いますか、多少なりとも参考になればと思っています。



音楽プロデューサー協会

www.facebook.com/ProducerKyokai



2010年新年名刺交換会 会員とほかの皆様



協会親睦旅行にて



Classic Vicus 第9号 2013年11月 音楽プロデューサー協会発行 編集:志村嘉一郎 デザイン:梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

在原勝	(株) 東京プロムジカ 代表取締役
石川尚樹	(株) コンセールブルミエ 代表取締役
上野喜浩	すみだトリフォニーホール プロデューサー
内田一成	(株) フューチャーデザイン 代表取締役
梅津知美	(公財) 多摩市文化振興財團
江藤昌子	こぶしらぶ主宰 プロデューサー
小川光彦	アーツコム東京(株) 代表取締役
小尾旭	(株) ミリオンコンサート協会 代表取締役
兼岩好江	(有) アルシュ 代表取締役
榑松大剛	ロングランプランニング(株)(カンフェティ) 代表取締役
黒川浩明	(有) 大阪アーティスト協会 代表取締役
向後由美	アッコルド出版(Webアッコルド)
小林信一	一般財団法人合唱音楽振興会 事務局長/東京混声合唱団 常務理事
佐々木利佳子	(特) 日本室内楽アカデミー 理事長
佐瀬亨	せきれい社(雑誌「サラサー」編集) 代表取締役
志村嘉一郎	ジャーナリスト、前帝京大学教授 元浜離宮朝日ホール総支配人
白神克敏	(株)ヴォイシング 代表取締役
戸部山起子	(有) エクレジアアーツ 代表取締役
中根俊士	(株) 東京アーティスツ 代表取締役
萩生哲郎	ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
橋本伸一郎	(株) いちべる 代表取締役
平井満	横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会 代表

広瀬清	(有) 新演奏家協会 代表取締役、(特)日本青少年音楽芸能協会 理事長
松崎三恵子	(株) シド音楽企画 代表取締役
松本京子	(有) おふいすべガ 代表取締役
丸田朗	(有) マルタミュージックサービス 代表取締役
南出卓	ミュージック・インク 代表
村上雄一	(株) ユーラシック 代表取締役
村田亨	(株) テレビマンユニオン 音楽事業部
藪田益資	クラシック・ニュース プロデューサー
吉井實行	オーケストラ連盟 事務局長
名誉会員	
家永勝	(株) 家永音楽事務所 代表取締役
代表幹事	中根俊士
幹事	藪田益資、村上雄一、丸田朗、榑松大剛、 向後由美、佐瀬亨
監査	志村嘉一郎
事務局長	丸田朗

音楽プロデューサー協会
273-0037 船橋市古作3-1-15-308
Tel047-335-2002 Fax047-335-2062
(有) マルタミュージックサービス内

2013年11月現在